

チャペル ブックレット No.25

『迷い出たダンゴムシのたとえ』がわたしたちを生かす

早瀬 和人



NGU
Culture & Human Resources
NAGOYA GAKUIN UNIVERSITY

名古屋学院大学 宗教部

チャペル ブックレット No.25

『迷い出たダンゴムシのたとえ』がわたしたちを生かす

早瀬 和人



名古屋学院大学 宗教部



はやせ かずと
早瀬 和人

- | | |
|----------|--|
| 1962年 | 名古屋市生まれ |
| 1986年 | 立命館大学文学部哲学科心理学専攻卒 |
| 1987年 | 同志社大学神学部編入学 |
| 1991年 | 同志社大学大学院神学研究科博士課程前期修了 |
| 1991年 4月 | 日本基督教団新潟教会伝道師
その後、湖山教会牧師（鳥取市）、能勢口教会
牧師（兵庫県川西市）を歴任。 |
| 2016年～ | 宇治教会牧師／附属愛児園園長 |

11歳まで、名古屋学院中高近くの大幸住宅（砂田橋）に住んでいました。子どもの頃に、名古屋学院の50mプールで泳いだことや愛校祭に行ったことは、しっかりと記憶に残っています。また小学4～5年の夏、名古屋YMCAの野外活動で北アルプス上高地～焼岳や燕岳登山を経験した影響で、以後毎年のように、北アルプス、南アルプス、八ヶ岳、鈴鹿山脈と登山を続けています。まもなく50年近くになります。

『迷い出たダンゴムシのたとえ』がわたしたちを生かす

早瀬 和人

皆さんは幼い頃、ダンゴムシを拾って集めた経験はありますか？
聖書の言葉と1匹のなくなったダンゴムシのお話をもとに、
共生社会の実現について一緒に考えてみましょう。

はじめに - 自己紹介をかねて -

僕は名古屋学院中高のある東区砂田橋で生まれ育ちました。1962年の寅年生まれですが、虎（トラ）よりも断然、竜（ドラ）が好きな中日ドラゴンズファンです。もう50年以上昔のことですが、名古屋中高の南側には大幸住宅という団地があり（現在は大型ショッピングセンター）、僕の生まれ故郷です。そこから矢田小学校に通いました。「ナゴヤドーム隣の小学校やで！」といつも自慢気に語っていますが、もちろんその頃にドームはありませんでした。後に尾張旭市に転居。大学進学のため京都へ。牧師になり新潟→鳥取→兵庫そして再び京都へ。今は宇治教会で牧師をしています。

宇治教会は、数年前に史跡名勝指定された「宇治山」の麓に立地しています。教会のすぐ裏にはその宇治山が迫っているのですが、ある日のこと、宇治市役所から古墳調査員がやって来て、測量用三脚を立てて何やらごそごそと調査を開始。園児たち興味津々近寄ってきて……

「おっちゃん！何してるん？」「古墳の調査。」「コフンって？」園長、やや興奮気味に、「この中から、鏃（やじり）とか、埴輪（はにわ）とか、勾玉（まがたま）とか出てくるんやで～」と曇み掛ける。すると調査員、「そんなことはありません。ここが“古墳（コフン）”だからと言って“興奮（コーフン）”しないでください！」とても真面目な顔してオヤジギャグ……と思いきや、もっと素敵な言葉を語ってくれました。「目には見えないけど、その見えないところに目を注ぎながら、私らは仕事をしています」だって。聖書にもこれに似た言葉が出てきますので、ぜひ調べてください。

マタイによる福音書18章10～14節（「迷い出た羊」のたとえ）

「これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい。言っておくが、彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである。あなたがたはどう思うか。ある人が羊を百匹持っていて、その一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、迷い出た一匹を捜しに行かないだろうか。はっきり言っておくが、もし、それを見つけたら、迷わずにいた九十九匹より、その一匹のことを喜ぶだろう。そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。」（新共同訳聖書）

羊について調べてみました。「羊は臆病で自衛力がなく、地理のわきまえがないので迷いやすい。そこから、神から離れて迷う人々の形容とされた」（『新共同訳聖書聖書辞典』新教出版社2001年より）。旧約聖書イザヤ書53章6節には、「わたしたちは羊の群れ。道を誤り、それぞれの方角に向かって行った」とあります。人は皆バラバラになり、迷子になり、道を見失ってしまう存在なのだ、と預言者イザヤは語ります。

新約聖書の時代。2000年前のイスラエルの地には、病人や障がいを抱えている人たち、貧しい人たち、あるいは「シナゴグ（ユダヤ教礼拝堂）で礼拝を守れないような奴らは罪人だ」とレッテルを貼られ差別されていた人たちがいましたが、イエス様はそのような人たちと出会われ、「イザヤが語る『羊』のようだなあ」と思われたのでしょうかね。2匹の魚と5つのパンで5000人の人たちをお腹いっぱいにしたという話を、皆さんも聞いたことがあると思うんですが、イエス様が移動するそのあとを、たくさんの人がぞろぞろとついてゆく。その様子をご覧になられ、「飼い主のいない羊のような有様」だ（マルコによる福音書6章34節）と言うんですね。この箇所もぜひ読んでみてください。いずれにせよ、今を生きる私たちもまた「羊のようだ」と、イエス様から見られているのだと思います。

さて、僕が遣わされている宇治教会には附属の幼児施設があります。子どもたちは春になると、「あ！いちばん大きいやつや！これ、オレのやで！」などと叫びながら“ダンゴムシ集め”に一生懸命になります。僕自身がダンゴムシ好きなもんだから、一緒になって大きさ比べとかダンゴムシレースとか、そんなことをして遊んでいます。

子どもたちに、「なんでそんなにダンゴムシが好きなん？」と尋ねてみました。「丸いところ」「カワイイところ」「静かで鳴かない。優しい」「すぐ捕まえられる」などと理由を語ってくれます。更に、「ダンゴムシは囓まへんで」と言う子がいたので、園長の私は、「ほな、この“囓まへん”ダンゴムシ、もらっても“かまへん”？」な～んて言いながら、（あぁ、全ての人がダンゴムシを愛でて、ダンゴムシのように丸くなり、囓むことなく、静かで優しくなって……。そんな感じになれたら世界は平和になるやらな～）と夢見る今日この頃です。



そして、♪ダンゴムシの歌♪が生まれた…

一生懸命に集めたダンゴムシを牛乳パックや虫ケースに入れて、子どもたちが保育室に持ち込みました。ある時、そのケースがひっくり返った。すると保育士が、「ダンゴムシ、もうお外に出しなさい！ここはダンゴムシのお部屋じゃありません」と声を上げた。それを聞いて落ち込む子どもたち。子どもたちは、「外に出す」という言葉から、「排除する」「仲間はずれにする」というのを連想するんでしょうね。「そんな言い方はアカンわ」と僕。「ほな、なんて言うたらええんですか？」と先生。何かいい言葉は無いかなあ……と考えるものなかなか思いつかない。言葉を探しているうちに、歌と寸劇を作っている自分がいました。

先生：「今日はとっても良い天気！これから坂の下の公園へお散歩に出かけましょう。みんな用意はいいかな？」

ダンゴムシA：「やったー！ねえねえ、運動会でやる二人三脚しながらお散歩しない？」

～ダンゴムシの二人三脚って見たことありますか？

ダンゴムシD：「えー、そんないややわ。二人三脚で足縛られるの嫌いやし、オレは一人でスキップしながら公園に行く！」

～ダンゴムシのスキップ、ぜひ想像してみてください。

ダンゴムシD：「どうしょ！足が絡まってしもた！うわー！誰か助けてー！」

～ダンゴムシの足が絡まる様子、イメージできますか？

先生：「あらら、どこかに行っちゃったわ、ダンスケくん！どこまで行くの～！一人で勝手に行かないでよ～！困ったダンスケくん。どんどん転がって行っちゃった。さあ、みんなでダンスケくん探しに行きましょう」

ダンゴムシたち：「よし、こういう時にこそ、この歌の出番だ。みんなで『ダンゴムシの歌』を歌いながら、ダンスケくんを探しに行こう！」

『ダンゴムシの歌』（作詞／作曲：早瀬 和人）

♪ダンゴムシ ダンゴムシ 探しに行こうよ

見つけたよ 見つけたよ 植木鉢のしたで

コロコロコロコロ～ 転がって

「あれ？どっか転がっていっちゃった！先生、探してー！」

豊田先生の ポッケのなか～♪

（楽譜を掲載できないのが残念……）

こんな歌を作って、ことある毎に歌っています。この歌、終わりがありません。「豊田先生の～」って歌うと、「次はヒロミ先生のところにも探しに行って！」とリクエスト。3～4人の先生の名前を入れて歌わないと終わりません。それから「ポッケ」だけじゃない。「アキラくんの 靴下のなか～」とか歌詞のアレンジを求められる。そうするとどんどんエスカレートしていくんです。ある時、あるお母さんが、「園長先生、ヘンな歌、教えないでください。昨日なんか、一緒にお風呂入っていたら、『お母ちゃんのおヘソの中～』って歌うんです！おヘソの次は……〇〇の中……。もうかんべんしてくださいよ」と言われてしまいました。

また、こんな「事件」もありました。ダンゴムシをいっぱい牛乳パックに入れて、お家に持ち帰った子がいました。次の日、そのお母さんから、「タカヤが昨日、ダンゴムシ入りの牛乳パックを食卓の上に置くんですよ。その後どうなったか分かりますでしょ？食卓の下にダンゴムシがゴロゴロ。『お持ち帰りは1人につき1匹まで』とか、そういうルール作ってください！」だって。まだ続きがあって、「1匹いない……。お母ちゃん探してや！一番大きいダンゴムシやねんから！見つからなかったら、明日

お母ちゃんが幼稚園行って大きいの探してや」と言われてしまったのだそうです。

さらに、♪ダンゴ虫の歌：大人ヴァージョン♪ が生まれた…

このことがあって、『ダンゴムシの歌 ver.2』ができました。次のような会話を織り交ぜた歌詞で歌います。

「迷子になったのは一匹だけでしょ？一匹くらいいいじゃないの。まだまだいっぱい持ってるでしょ～」

「大事なものを 無くしてしまうのは あなたの一番 駄目なトコ」

「もう少し 周りをよく見て 空気もよく読んで 生きていかないと どんどん転がって行く～」

「何でも 世の中は 自己責任 自己責任って 言われるんだから」

「自己責任 自己責任 何度も聞かされた 駄目だよ 駄目だよ そんなこと言うてたら」

あの子も この子も 一緒に生きる 共生社会 みんなで創ろう～♪

コロコロコロコロ～ 転がって みんなで生きてゆく 世の中創ろう～♪



まだまだ続く、♪ダンゴ虫の歌：賛美歌ヴァージョン?!♪

日曜日の礼拝で、つい得意になって歌ってしまいました。「う～ん、賛美歌とちゃうな～」と言われてしまいました。ちょっぴり悔しくなって、次のような歌詞を盛り込むとー

♪コロコロコロコロ 転がって～、「あれ？どこ？」

イエスさまの腕のなか～ アーメン♪

と歌いました。賛否両論あり、まだ礼拝では1回しか歌っていません。

「1」と「多」の問題

「1匹くらいいいでしょ？まだ箱の中にいっぱいいてるやんか。」この“いっぱい”が聖書の99匹に重なりました。子どもの「99」よりも「1」を大事にする姿が見えてきます。この「1」を大事にする社会が本当に必要だと痛感。つい大人は、「ええやん、1匹くらい」と言ってしまうがちです。でも今の世の中、「1」を大事にしている大人社会と言えるのだろうか？と問われたのでした。

イエス様はそんな「1」を大事にされます。「迷い出た羊のたとえ話」。想像するに、「ちょっと探しに行くから、みんなここで待っててな」と羊飼いは言ったことでしょう。すると、その99匹の中に、「アイツはしょっちゅうどっか行っちゃうんや。一人で帰ってくるし、あんなん放ついたらええで。なんぼ言うても分からんヤツやし」と声を荒げる羊がいたかもしれない。それでもイエス様は探しに行く。そして見つけ

たら喜んでですよ。これね、ルカによる福音書にも同じ話があって、「見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください」(15章6節)と書かれています。『1』が戻ってきた、みんなで喜ぼうよ！」これ、僕らの今の社会でどこまで出来ているだろうか、と、すごく問われているような気がしてなりません。「よう帰ってきた。もう同じ過ちを繰り返したらあかんぞ」と言うことはあったとしても、その後に必ず「一緒に喜ぶ」。これ、できているだろうか？と。こういう社会が大事だなんて、つくづく思わされています。マルコによる福音書8章36節に、「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があるのか」とあります。その命を失ったら何の得もない。その「1」が大事なんや！というイエス様の眼差しを大事にできているだろうか……と。

ダンゴムシを通して「1」の大事さを見つめることができます。

コロコロ転がっても、本当に大丈夫？

「転がる」という言葉にどんなイメージを持っていますか。キリシタン迫害の時代、信者が踏み絵を踏むと、「アイツ転んだ」なんて言葉や、随分前にある政治家が、オリンピックに出場したあるフィギュアスケート選手のことを、「あの子、大事な時には必ず転ぶ」と失礼な発言をした。「転ぶ」という言葉は、「挫折」だったり「失敗」だったり「仲間はずれ」だったり「置いてけぼりにされる」など、あまり良いイメージで使われてはいません。

自分が転ぶってというのは痛い。だから転びたくなんかない。でも、転ぶのは自分だけじゃない。転んでいる誰かを見る……ってことだってあります。実は、そのあとの時間の流れが大事になってきます。「助けてあげたいけどなぁ。ここで時間を潰したら電車一本乗り遅れてしまう。今のは見なかったことにしよう……。」そういうこと、やってしまうことはありませんか？これと同じ話が聖書に出てきます。ルカによる福音書10章25節以下の「善いサマリア人」の話です。ある人がイエス様に尋ねた。「何をしたら『永遠の命』(神様と共に生きるいのちのこと)を受けられるのでしょうか」と。するとイエス様はたとえて話をされました。30節以下です。

「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った」……。ちゃんと見ていたんですよ。見たのに道の向こう側を歩いて行った。

「同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。」このようなお話です。

イエス様は、「だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」と尋ねます。すると、「その人を助けた人です」と質問した人は答えた。それでイエス様は、「あな

たも同じようにしなさい」と言われたわけです。簡単に言えば、「転んだ人のそばに寄り添ってあげなさい」ということですよね。自分だって転ぶ。でも自分だけじゃない、隣のお友だちも転ぶ。それを見た幼稚園の子どもたち、子どもたちにはできるんですよ。「先生待って！ユウダイちゃんが転んじやったよ～！お願い、ちょっと待って。ストップして！スト・ト・ップ！」転んでしまったユウダイちゃんが立ち上がるのを待つことが、3～6歳の子どもたちにはできるんです。でも、年を取ってくると、できなくなっていく。なんで……？いろいろな事情があるんでしょう、大人の事情っていうのがね。なんでできなくなってしまうのか……？いつもこの箇所を読みながら考えさせられています。

「何でそんなところで転んじゅうの？ちゃんと前を見ていないからでしょ！ほらここ、段差があるでしょ」「何で転ぶの。それはあんたの不注意とちゃう？自己責任やで」とか、そういう言葉が飛び交う世の中です。ここでしっかりと考えてほしい。転んでしまうのは、それって自己責任の一言で片づけてしまっていいのだろうか？と。

怪我をする、転ぶ、試験で赤点を取る。それは自分の不注意だ、勉強不足だ、自己責任だ、という部分は確かにあるでしょう。でもその転んだ後どうなるのか？転んだ後には何が待っているのか？追いはぎに遭った人を見たレビ人や祭司。見たけれども、立ち去っていった。「そんなんは自己責任や。自分で立ち上がるのを待ってればいいだけ。」こんな言葉で片付けてしまう世の中のことを、皆さんはどう思いますか？

とはいうものの、やっぱり「転ぶ」と怪我をするし痛いし、置いてけぼりにだってなる。だから、転がってしまわないように、転がってしまうことを恐れながら生きている。「転ぶ」を「失敗する」という言葉に置き換えたっていい。失敗するのは怖いし絶対に嫌だ。失敗しないように一生懸命に生きる、そんな私たちがいます。

世の中を見ると、一方で転んでしまった人たち、生活苦の中にある人たち、派遣切りにあい仕事を無くした人たちがいるグループ。もう一方で、「いやいや、私はまだ大丈夫。なんとか生きてるから、“あの人たち”とは違う」というグループ。つまり、転んでしまった人たちと、そうでない人たち。これが両極分化、両方にパカッと分かれてしまっている世の中のような気がします。これこそ、まさに格差社会。転んで起き上がった経験のある人は、(また転ぶかもしれない)と不安を抱えている。でも、そんなことは考えたくもないから、「私は大丈夫」と自分に言い聞かせながら生きていたりする。そしてまた、変化を恐れ、現状を何とか維持しよう、人と違うことはない方がいい、そんな気持ちにもなって生きている。この心理がますます格差社会を色濃くしているのかもしれない。

コロナ下だからこそ“ダンゴムシ探し”

そこで改めて、「ダンゴムシを愛でる子どもたち」から学びたいのです。

ある子は、「このちっちゃいダンゴムシが一番かわいい！」と言う。ある子は、「大きいのがいいに決まってる」と言う。それぞれに「こっちがいい、あっちがいい」と

主張し合っています。いずれにせよ、いろんな違いのあるダンゴムシを子どもたちは集めている。その姿を見ながら「違いを喜ぶこと」、その豊かさを身につけてほしいと願うものです。

でも、どこで変わってしまうのでしょうか？大人になるにつれ、バラバラでなく平均化された生き方のほうを選ぶようになっていく。そういうところに生きる価値を求めようとしているような。「転がらないように、飛び出さないように、目立たないように、孤立しないように」というのは、まさにこの大人社会の生き方に合わす上で必要不可欠。たくさんの人と同じ考えでみんなと一緒にいいと考えることで、転がらずに済むと考えるわけです。

「一つになる」というのと「同じになる」。似たような言葉だけど、これ全然違いますよ。「一つになる」。今、私たちは一つの教室に集まっている。でもみんなバラバラ。ここはバラバラな人たちが“一つになる”空間。一方で「同じになる」というのは、同じ制服を着ている姿を思えばいい。もしかしたら僕らの心の中には、意識してか無意識かは分かりませんが、同じになる方を選んでしまい、そっちの方が生きるの楽やなぁ、とってしまうところがあるんじゃないだろうか？と考えてみてください。

コロナ禍の下でのここ数年間、「同調圧力」とか色々ある。学校が休校になっていた時期、近所の子どもたちが公園で遊んでいると、「なんでそんな所で遊んでいるの？外出たら駄目でしょ！」と言う大人がいた。そんなに駄目なことかな、と悲しい思いをしたものでした。子どもも辛いけど、「皆と同じにならないとアカンやろ！」と思う大人、人と違うことを恐れるあまりに、「ダメでしょ、そんなことしたら」と口にせずにはおられない、そんな大人の心のありようも悲しいな～と思いました。いずれにせよ、転がらないように、飛び出さないように、孤立しないように、一人ぼっちにならないように、ビクビクしながら生きていませんか？私も、あなたも、隣のあの人も……。

ところで、ついこの間の衆議院選挙。ある青年と話をしました。僕は有志で市民グループの活動に関わったりしていますが、選挙が終わった後、そのグループの人たちとお会いしました。その時、ある青年が、「やっぱ世の中ヘン。選挙で世の中を変えなアカンと思っている。でももし僕が、〇〇党に入れたとしたら……」と途中で言葉を濁した。『民主』っていう言葉が付く政党3つあるじゃないですか。自由民主党、立憲民主党、国民民主党。僕は『民主党』って書いて投票することにした」と語ってくれました。彼に「何でそんなことしたの？」と尋ねると、「自分が投票したいのは、本当は〇〇党。でもそこに入れると多分“死に票”になる。自分の一票が“死に票”になるなんてのは嫌だ。せやったら、多くの人が入れる政党の方に入れた方が、あとあと安心できるような……。それで、自分をごまかす意味でそう書いてしまった」と語るんです。僕は感じました。（きっと変化を恐れているのかも。先を読んで転ばないようにとか、損をしないようにとか、そういう気持ちの表れだったのかも）と。

「迷い出たダンゴムシのたとえ」が私たちを生かす

何かを恐れて生きている私たちがいるものです。でも、聖書を通して教えられ考えさせられていることは、もしイエス様がこの光景をご覧になられたら……ということ。迷子になって転がってしまった羊はね、「うわー、しまったー！羊飼いの言うこと聞いてへんかった。自分勝手な行動してしまったー！」って思ったに違いありません。今の世の中だったら、「それはあんたの自己責任でしょ。日頃から注意していないからそんなことになったんとちゃう？」と言われてしまいそう。でも聖書は、その転がって迷子になった“理由”を問うてはいません。一生懸命探しに行くイエス様がいるだけです。そして見つかったら「一緒に喜ぼう」と。ここに大きな意味があるんじゃないのかな。

イエス様の眼差しに倣って、小さな「1」、そこに思いを寄せていける心の余裕、想像力っていうものを養いたい私たちです。そして、「このいちばん大きいダンゴムシがめっちゃ大事やねん！」と訴える子どもの声を聞いて、私たちはどう応えていけるのか。「めっちゃ大事やねん！」「そうか、そうなんや。そんなにすごい見つけたんや。分かった、ほな、いなくなったその子を一緒に探そうね」と思いを合わせられる余裕や、「転がってしまい迷子になっても大丈夫だよ。お父ちゃんもお母ちゃんも先生も見つけてあげるよ」といった声を発していけるかどうか。

コロナ下でますます「1」よりも「多」に重きが置かれていく空気がまん延しています。そこで今一度、「迷い出たダンゴムシのたとえ」に学ばなければ……と思っています。「ダンゴムシの」いや「迷い出た羊のたとえ」を通して、共に生きる社会について考えていきたいと思います。

最後に - 受講生に質問を -

皆さん、今までの「転がった経験」「人生に迷った経験」について教えてください。その時、どんなことが／どんな言葉が、支えとなっていましたか？と問いかけました。

(受講生全員スマートフォンを用い、Formsによるオンラインシステムでたくさんの感想と質問をいただきました。ありがとうございました。)

『迷い出たダンゴムシのたとえ』がわたしたちを生かす

早瀬 和人

チャペルブックレット No.25

2022年3月31日発行

編集・発行

名古屋学院大学 宗教部／キリスト教センター

〒456-8612 名古屋市熱田区熱田西町1番25号

TEL 052-678-4096

印刷 有限会社 五十嵐印刷社



Culture & Human Resources

NAGOYA GAKUIN UNIVERSITY

名古屋学院大学
